

RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文

第7回:落語とSF-はじめての接触

いやー、すごかったですねー。
何がってあなた、決まってるじゃ
ありませんか。獅子座流星群。ま
さに満天の流れ星。華麗なる天体
ショー。数百個、いや、数千個の
流星が長い尾をきらめかせながら、
夜空狭しと無数に駆け巡るさまは
圧巻でした。

何？ あなたも見ていたけど、
1時間ねばっても20個ぐらいし
が見られなかった？

ああ、やっぱり都会はね。ネオ
ンとかが明るいから。うちは田舎
でしょう（繰委馬郡へキサ繁八
村）。やっぱり全然ちがったみたい
ですね。流れ星に願い事をしたら
かなうというから、いろいろ願
いしたんですが、何しろ流星がや
たらと多くて、願い事が2000
個超えたあたりでもうへとへとに
なりましたよ。内容も種切れに
なって、「隣の犬があんまり吠えま

せんように」とか「今夜は蚊に刺
されませんように」とか「明日の
昼、社員食堂で食べるカレーに肉
がたくさん入っていますように」
とかそんな願い事しか残ってなく
て……。でも、えらいもんで、ほ
とんどの願いが叶ったんで驚きま
した。迷信とかいって馬鹿にして
はいけませんね。いや、ほんと。
ほんとのほんとなんです。ほんと
に、次の日の昼、カレーの肉がい
つもより一切れ多かったんです。
ええ、私、いつも数えることにし
ていますので。

というような馬鹿なことをいつ
までも書いていてもしょうがない
ので、さっそく（どこがさっそく
だ）本論に入ろう。

今回は「最初の接触」がテーマ
である。

え？ 最初の接触？
「私、はじめてなの。優しくして

ね」

とかいうやつですか。うわっ
……。うわっ。

こらこら、何を考えとるねん。
神聖なガイナックスのホームペー
ジにそんないかがわしい文書を載
せるはずがないだろう。つまり最
初の接触というのは……。

最初のセックス？ うわっ……
うわっ。

よう聴け！ セックスやない、
セシヨクや。なにもいやらしい
こととちゃう。異星人との最初の
接触について今回は……。

異性との最初の接触？ やっぱ
りや。うふふふふふ。

だまれ、こいつは！ いやらし
いこととちゃう言うとるやろが！

でも、粘膜と粘膜の最初の接触
でしょ。うわっ……。

どない言うたらわかるんや。要
するに「最初の接触」というのは、

地球人類にとってははじめての体験
ということだ。

はじめての体験？ 青い夏の日
の一夜のめくるめく初体験……。

ちゃうちゃう。君、その考えか
ら離れなさい。つまり、英語で言
うと「ファースト・コンタクト」。

ファースト・キス？ つまり、
最初の接吻ですな。

もうええっちゅうねん。しかし、
君も古い言葉知ってるねー。

前振りが長くなってしまったが、
地球人類が有史以来はじめて他の
宇宙人と出会う。そんな感動の瞬
間のことをファースト・コンタク
トというのだ。最近はそのような題
名の映画もあったような気もする
し、けっこうポピュラーな言葉で
はないだろうか。

え？ どうせおまえのことだから、
はじめてするコンタクト・レ
ンズは目に痛い、とか、ものすご

RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文

第7回:落語とSF-はじめての接触

く急いでいる宇宙人と遭遇して、接触したと思ったら相手はあっというまにどこかに行ってしまった、これがほんとのファースト・コンタクト.....というようなネタを使うのだろうって？

ギク。

いや、もちろんその二つは思いついたのだが、やはりお金をいただくにはあんまりなネタなので今回は禁じ手とした。

さて。

地球人が宇宙に進出し、銀河系へとその勢力を拡大していく過程において、そういった知的な種族に全く出会わなかったとしたら、それこそさびしいことではないか。広大な宇宙には、知的生命体は我々だけしかいないのか。そんな孤独感を味わうことになる。

ひとりぼっちはいやだ。仲間がほしい。そういう思いが地球人誰

彼の心にもあり、それが人類が宇宙へと進出していくにあたっての大きな推進力となっているのかもしれない。

おお、久々にまじめな文章を書いてしまった。

そういえば、こないだスペースシャトルの打ち上げ（宴会のことではない）をテレビで見ていると、紅蓮さんとかいう信じられないほどお歳を召したかたが乗り組んでおられたので驚いた。うーむ、宇宙開発もそういう時代になったのだなあ。

そうそう、あれは私もびっくりしました。

君、まだ帰ってなかったのか。はよ帰り。

そう邪険にしないでくださいよ。しかし、とうとうそういう時代になったんですなあ。何と言ったらいいのか言葉につまりますが、人

口爆発、世界的な高齢化社会の到来なんかを考えるとしかたのないことかもしれませんなあ。

あのー.....何を言うてるの？ わしゃ紅蓮さんのことを話してたんやけど。

私もそうですよ。でも、ひどい話ですよ。いくら歳をとったからといって宇宙を姥捨て山にするなんて。年寄りの知恵というものは、我々若いものも.....。

あほ！ あれは、捨てに行ったんやない。また、帰ってきはるんじゃ。

え？ そら無駄なことを.....。

ボカッ。

ドスッ。

これでしばらくは寄り付くまい。

えーっと、何の話でしたっけ。そうそう、人類が宇宙へ進出する過程で、人類以外の生命体と出会うという話。

しかし、いくら「知的」とはいっても、我々人類の尺度から測れることなんかしれている。中には、我々の理解をこえたような生命にでくわすこともあるかもしれない。

たとえば、「船長、宇宙船です。人類のものではありませんっ」

「何！ ということは、我々は人類初のファースト・コンタクトを成し遂げたというわけか。歴史の教科書に名前が載るぞ。よし、さっそくあの宇宙船に通信を送れ。内容は、そうだな、はじめまして、でよからう」

「せ、船長、返信です。あの宇宙船からのものです」

「内容は？」

「えーっと.....こうこうじだいちりもつもればらんどせるにはこんこんきつねそらみたことか.....とあ

RAKUGO
THE
FUTUREJAPANESE TRADITIONAL
ENTERTAINMENT

RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文

第7回:落語とSF-はじめての接触

ります」
「な、何のことだ……」
「わかりません。高校時代塵も積もればランドセルにはコンコン狐そら見たことか、と言うことでしょうか」
「うーん……ますますわけがわからん。知的種族にはちがいないようだが……何か深い意味があるのだろうか」
「あっ、船長。文末に、7文字で改行して、文頭を読み、と指示がありました」
「7文字で改行？

こうこうじだい
ちりもつもれば
らんどせるには
こんこんきつね
そらみたことか

そうか！ 頭だけ読めば、こちら

こそ、となる。彼らは、我々の通信に対してこちらこそと返事をくれていたのだ。何という礼儀正しさだ。ああ、これこそが人類初の異星人との間のやりとりなのだ」
「また、メッセージが来ました。もしもしやぎよやぎさんよひつじもとんぼもでておいであしたはあしたのかぜがふくからうれしやかなしやひとりさけをのむふらんくしなとらいいつでもよんでくれればかけつけるからいからかれーはうまいんやわしのほんはなんでうれへんねん……このあとも延々と続きます。膨大な量です。ああっ、この船のコンピューターのメモリーがいっぱいになってしまいました」
「今度も7字目で改行するのか」
「あっ、やっと受信終わりました。今度は1 5 3 7 2文字目ごとに改行して文末の字を読み、となっています」

というような種族でも困る（このネタ、長いわりにいまいちでしたね）

また、相手がたとえばむちゃくちゃ口が臭いとかむちゃくちゃ納豆が嫌いとかむちゃくちゃ音痴なのにカラオケで唄いたがるとかむちゃくちゃいびきがうるさいぐらいならまだいいのだが、いくら知的でも、コミュニケーションの際には相手を食う、というような習性を持った種族でも困るし、身長が

1億5千万キロとかいうでかいやつらでも意思の疎通をしがたい。寿命が3日しかない、というような生物でも困るし、相手の肉体を叩きのめすことによって意思を伝達する筋肉隆々のアクション型宇宙人というのも相手にしたくない。

これらは相手の宇宙人が人類の理解を超えていたり価値観が相違していたりという場合の例だが、

ファーストコンタクトにはそういった種族間の壁以外にも思わぬ障害があったりする。

つまり、宇宙を航行している船舶に乗っているのは、ファースト・コンタクトの場にふさわしい人物とは限らないということだ。相手は、その種族を代表するような深い知性をもった人物なのに、地球人側はただのあほということもありうる。

「何という驚き、何という喜び。我々にとって歴史的な瞬間です。我々以外の知的生命と遭遇できるとは。私の体は誇らしさと歓喜と晴れがましさに打ちふるえております」

「なんやしらんけど、変な通信入ってきよるなあ。あのけったいな形した船かいな。うっとうしいさかい、はよ、どっか行ってくれんかなあ」

RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文

第7回:落語とSF-はじめての接触

「我々は 星第8惑星 に住む生物です。今、我々の姿を画像でそちらにお送りいたします。ああ、これが私たちの姿がはじめて皆さんの目に触れる瞬間なのですね。知的種族同士、これからお互いの魂を高めあうような関係を築きたいものです」

「わっ、変な絵送ってきよった。手が後ろにまわるようなやつとちゃうやろなあ。ありゃー、なんやこれ。気っ色わるー。頭のうえにびらびらあるやんか。おえっ、胸悪なってきた。ほんまにうっとうしい連中やで。通信切ってもたろ」

これではせっかくのファースト・コンタクトも台なしである。

また、ファースト・コンタクトの相手が友好的な宇宙人とは限らない。宇宙人が皆、サンタクロースやジャムおじさんやえべっさんやオバQやくまのパディントンや

田中啓文氏のように善良であるかどうかはわからないのだ。

考えて観れば、ほとんどの侵略テーマSFはある意味ではファースト・コンタクト物ともいえるのである。突然、地球に出現した謎の円盤は街を次々と破壊していった……みたいな話はいくらでもある。何とかかんとかというSF映画がたしかそんな話だった(完全に題名を忘れた。だったら書きな!)。ウエルズの有名な「宇宙戦争」にしても、ハインラインの「人形つかい」にしても、地球人がはじめて接触した知的生命体ということに変わりはない。ただ、相手が少々邪悪だったというだけだ。

そういえば、アニメでもありましたな。突然、宇宙からガミラスとかいう悪いやつが攻めてきて、トヤマだかエチゴだかいう戦艦がどこかに行くとかいう話が。え

えっと……どこに行くんだっけ。たしか、獰猛な犬が誰かを噛む、というような名前……あ、そうそう、犬噛んだる。犬噛んだるというところに掃除機を取りにいくんですよね。あれも、いわばファースト・コンタクトした相手が悪かった……というような話ではないか。

余談だが、イスカンダルという魅力的な名称は、原作者が、江の島の水族館で思いついたという有力な説があるらしい。その時、彼はバンドウイルカのダンスを見物していたのだが、そこでハッとひらめいて、イルカダンスという言葉の順序を入れ替えて、イスカンダルという星の名が誕生したという。

本当は、ここでエヴァンゲリオンのことを書ければよいのだが、何しろ全く観ていないので何も書

けないのである。そんなやつがガイナックスのホームページでエッセイを書いていていいのか!とお怒りのかたもいらっしゃるかもしれないが、統括本部長のT氏も「わしは見とらんけん」と言っていたぞ(嘘)。

ああ、むちゃくちゃ余談に入ってしまった。

ところで、こういった宇宙人の接触は、これから先の未来において起きることではなく、もうすでに行われているのだ、という考えもある。例のロズウェル事件とかいうのもそのたぐいだ。つまり、宇宙人はとっくの昔に地球に来ていて、地球人の一部と接触していたのだ、というやつだ。そういうことを書いたトンデモな本も多く出版されている。NASAが宇宙人の死体を隠しているとか、私は海王星人に犯されたとか、農場で

RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文

第7回:落語とSF-はじめての接触

牛が焼け死んだのは宇宙人の仕業だとか、最近キャベツが一個598円もするのは宇宙人の仕業だとか、宇宙人がスーパーでキャベツを万引きしているのを見たとか、ゴキブリホイホイに宇宙人がかかっていたとか、おむすびが穴にころころと入っていったので追いかけていくと宇宙人が餅をついて金銀財宝をもらったとか、駅前のお好み焼き屋のおっさんは実は宇宙人だとか、何を隠そう私は宇宙人だとか、サラ金のCMで宇宙人を目撃したとか、まったくもっていろんなことを考えつく連中がいるものだ。だいたいNASAが宇宙人の死体を隠すなどというそんなNASAけないことをするやろか。もし、それが本当だとしたら、よほどそういうことをNASAざるをえない理由があったにちがいない。みなさんはどう思

いNASAる？

ちょっとむりやりでしたね。

ここで、NASAのかたに提案したい。昔からミステリのほうでは、木の葉を隠したい時は森に、死体を隠したい時は死体の中に、といわれている。それが一番見つかりにくいからである。宇宙人の死体を隠すなら宇宙人の死体の中である。もちろん、そのためには、まず宇宙人を大量に殺害しなくてはならないが。そんなんそこらへんにいっぱいいてまんねやろ？

スパルバークの初期代表作の一つである「未知との遭遇」も地球人とUFOとの接近遭遇を扱った内容だった。レミドドソーという音列とともに豪華シャンデリアが降ってくるシーンはよく覚えている(オペラ座の怪人も、そういう意味ではファースト・コンタクト・テーマか)。たしか、原題は第

3種接近遭遇とかいって……。

そうそう。第3種接近遭遇。知ってますよ。

また出てきた。帰ったんちゃうかったんかいな。

昔、はやりましたよね、第3種接近遭遇。Aまで行ったとか、Bまで行ったとかいうアレでしょ。第3種接近遭遇ということはCまで行ったわけですね。そういえば、宇宙人に犯されたとか宇宙人の子供を妊娠したとかいうトンデモなノンフィクションがありますが、あれが第3種ですね。未知との挿入・・・やなんて。うわっ……うわっ。

あんた、もう枚数がないんやから帰りなさい。私も帰るから。

というわけで、そろそろ落語の話をしていけいけないのだが、ファースト・コンタクトにふさわしいネタがあるだろうか。

うーん……。

うーん……。

うーん……。

こんな小咄がある。

誰もスイカを見たことがないという山奥の村があった。その村の道に、ある日、どういうわけかスイカが転がっていた。村人たちは、その異形の物体におびえ、遠巻きにしていたが、一人が棒で殴りつけてみた。スイカはぱっかりと割れ、中から汁がほとぼしり、真っ赤な内部をさらけ出した。それを見て、一人が叫んだ。
「鬼だ！」

これで終わりです。

スイカは、我々にとってはただの無害な果物だが、一度もスイカを見たことのない人々にとっては、リンゴやミカンといった通常の果物の概念からははるかに巨大だし、緑地に人為的としか思えない黒い

TANAKA HIROFUMI
P R E S E N T S

RAKUGO
THE
FUTURE

JAPANESE TRADITIONAL
ENTERTAINMENT

RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文

第 7 回:落語と SF-はじめての接触

不気味な縞模様が描かれているし、
中は外観からは考えられないよう
な真っ赤な肉で満ちており、血と
も思えるような汁があふれだす。
村人にとっては、日常を飛び超え
たその物体は「鬼」なのである。
これが、この村の人々とスイカと
のファースト・コンタクトだった
わけである。

